

奈良県吉野郡十津川村大字上湯川にあった小中学校 (1875～1970年)に関する調査報告

伊藤拓海

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

馬 鵬飛

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修)

Research Report on the Former Elementary School and Junior High School (1875-1970) in Kamiyunokawa Area of Totsukawa Village, Nara Prefecture

Takumi ITO

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education)

Daichi KOMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Pengfei MA

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education))

要旨：奈良県十津川村をはじめとする山間地域の多くでは、人口減少が著しく、学校の統廃合が繰り返されてきた。本研究では、奈良県の南西端に位置する十津川村大字上湯川に焦点を当て、そこに1875年から1970年にかけて95年間存在した学校やそこでの授業等の様子を卒業生から聞き取り、また学校跡とその周辺の現地調査を行った。こうした学校について、卒業生がいるうちに記録をまとめ、今後のへき地教育研究や地域のための資料とすることは重要である。

キーワード：十津川村 Totsukawa Village
山間地域 Mountains area
へき地教育 Rural education
廃校 Closed school

1. はじめに

1. 1. 研究の目的および背景

近年のへき地小規模校教育に関する研究では、「へき地」とされる山間地域や離島等に位置する学校の不利な条件の克服だけでなく、積極的な面を他地域に対しても広く浸透させることを目的とした研究も進められている(玉井、2018)。1970年代以前は、へき地は他地域に比べて遅れているといった印象が強く、マイナスの部分ばかりが挙げられ問題視するような風潮があった。しかし、それを打開すべく、へき地教育のあり方を再確認する研究や取り組みが進められてきた。奈良教育大学でも、奈良県教育委員会および奈良県へき地教育振興協議会と連携協定を結び、へき地教育の発展を目的とした取り組みがなされている。

本稿では、奈良県の南西端にある吉野郡十津川村大字上湯川(かみゆのかわ)に95年間にわたり存在した

学校(十津川村立上湯川小学校および十津川村立第六中学校上湯川分校)を対象に、学校およびそこでの授業等の様子を明らかにしたい。十津川村では学校の統廃合が繰り返され、2017年には小学校2校、中学校1校の体制となった。その中で、大字上湯川の学校は、山上に跡地のみが残っている状態である。しかし当時の学習環境や学校生活について調査・研究することは、今後の教育や地域のあり方に示唆を与えてくれる面があると考えられる。

1. 2. 研究方法

本研究は、文献調査、聞き取り、現地踏査等のフィールドワークにより行った。現地調査は、2018年の5月、7月、11月の計3回実施し、3回目には学校跡を、当時の通学路のひとつを利用して訪問調査した。

聞き取り調査の対象は、旧上湯川小学校および旧第六中学校上湯川分校の卒業生である田中昌次氏(大字上湯川総代)で、現地調査にも同行してもらった。

2. 調査地域の概要

本研究で対象とするのは、奈良県十津川村の大字上湯川である。十津川村は、奈良県の最南端に位置し、面積は県の約 5 分の 1 (672.4 ㎢) を有する。人口は 3,306 (2019 年 1 月 1 日現在) で、減少が進んでいる。年齢階層別の人口では、男性は 60 歳代の割合が最大で、女性は 80~85 歳が最多である。十津川村には、もともと 55 の大字があり、多いところでは 200 人ほどが生活しているが、中には無人で機能していない大字も存在する。

大字上湯川は十津川村南西部に位置しており、49 ㎢の面積を有する。人口は、26 世帯、男性 23 人、女性 30 人、計 53 人 (2017 年 4 月 1 日現在) である。大字上湯川の集落の多くは、上湯川 (かみゆかわ) 沿いの谷底に近い山腹斜面に散在している (図 3)。上湯川は、三重県紀宝町と和歌山県新宮市の境界で海に注ぐ熊野川の支流である。大字上湯川の西部は、和歌山県御坊市に至る日高川の支流である丹生ノ川の源流域で、現在は無住となっている河俣集落はここに属する。大字上湯川の南部は、和歌山県白浜町に至る日置川の支流である広見川の源流域であるが、人家は存在しない。

主要道路は県道 735 号線で、上湯川および丹生ノ川の谷を東西に貫いている。この道路はもともと 1960 年に開通した上湯川林道 (森林資源開発公団有料道路) で、十津川村大字平谷と和歌山県田辺市龍神村とを結んでいる。林道開通の影響について扱った三村・西村・延藤 (1965) には、「必ずしも道路開設の結果によるものでもないが、人口流出にともなう校区の児童数減少によって小中学校統合問題がすゝみ道路開設はこれを促進する可能性を与えている。施設の集約化・教職員の確保を目的とした学校統合・学区再構成は当地区の如く集落散在地域にあってはスクールバス・寄宿舎制をとまなわざる

を得ないが、その結果は通学費・宿舍費等の父兄自己負担の増大となってもあらわれ、とくに山林労務者などの低所得階層への経済的圧迫となっている」とある。

現在の主な産業は、1982 (昭和 57) 年に設立された「農事組合法人 上湯川きのこ生産組合」を中心とするきのこ栽培である。このきのこは、ふるさと納税における返礼品としても取り扱われているなど、上湯川だけでなく十津川村全体においても大きな産業として位置付けられている (奈良県吉野郡十津川村、2010)。

3. 学校の概要

旧上湯川小学校は、十津川村大字上湯川の標高 490m 程に位置する仏峠に、1875 (明治 8) 年に創立された (十津川村教育委員会編、1975)。その後、1869 (明治 20) 年からの上湯川尋常小学校、1941 (昭和 16) 年からの上湯川国民学校を経て、1947 (昭和 22) 年には上湯川小学校に改称された。1969 (昭和 44) 年には、出谷小学校との名目統合で、西川第二小学校上湯川校舎となった。そして 1970 (昭和 45) 年には実質統合され、大字出谷に設置された西川第二小学校の校区となり、大字上湯川から学校はなくなった。上湯川の小学生はスクールバス通学となった。その後、2017 年に西川第二小学校は閉校となり、平谷小学校および西川第一小学校と統合され、大字平谷に十津川第二小学校が開校した。2018 年度は、上湯川からは 5 名の児童がバスで十津川第二小学校に通っている (十津川第二小学校、2018)。

旧上湯川小学校には、十津川村立第六中学校上湯川分校が 1948 年から 1962 年にかけて併設されていた。分校であったが、本校との関わりはほとんどなく、実質的には「上湯川小中学校」として機能していたようである。こちらは 1963 (昭和 38) 年に旧西川中学校に統合され、



図 1 調査地域全図 (基盤地図情報を用いて馬作成)

1 年間の西川中学校上湯川校舎としての名目統合を経て、翌 1964 年には完全統合された。2012（平成 24）年には、西川中学校、上野地中学校、小原中学校、折立中学校が統合され、大字小原に十津川中学校が開校した。

上湯川の学校については残された資料が少なく、学校経営案など当時の方針や、現場の状態、校歌等を記したものは見つかっていない。ただし柳瀬（1937）には校訓が掲載されている。

校訓

- 一、からだを丈夫にいたしませう
- 一、親切にいたしませう
- 一、れいぎ正しくいたしませう
- 一、きまりよくいたしませう
- 一、よく勉強いたしませう

図 2 上湯川小学校校訓
（柳瀬（1937）p.35 より）

3. 1. 通学路

旧上湯川小学校および旧第六中学校上湯川分校の卒業生である、現大字上湯川総代の田中昌次氏とともに、通学路のひとつを踏査した。写真 1 では、先頭を田中氏、その後ろを奈良教育大学の大学院生が続いている。写真からも分かるように、現在は使用されることがほとんどなく、かろうじて道であると判断できる状況であった。

今回踏査した道は、学校跡の北に位置する大井谷（図 3）からのもので、急勾配な山道であったが距離的には短く 10 分強で学校跡に到達できた。「小学生だった頃は、友達と道草を食いながら、30 分程かけて登校したり、道

に枯れ葉などを敷き詰めて滑りやすくし、滑り台の要領で先生から逃げるような仕掛けを作ったりして遊んだ」という。なお、学校跡地から西方にのびる「横道」も通学路としてよく使われ、後述するようにマラソン大会にも使用されていたそうであるが、倒木等の影響で踏査できなかった。

学校の北側（正門の向かい）には大きな更地があり、



写真 1 旧上湯川小学校までの通学路
（2018 年 11 月 4 日伊藤撮影）

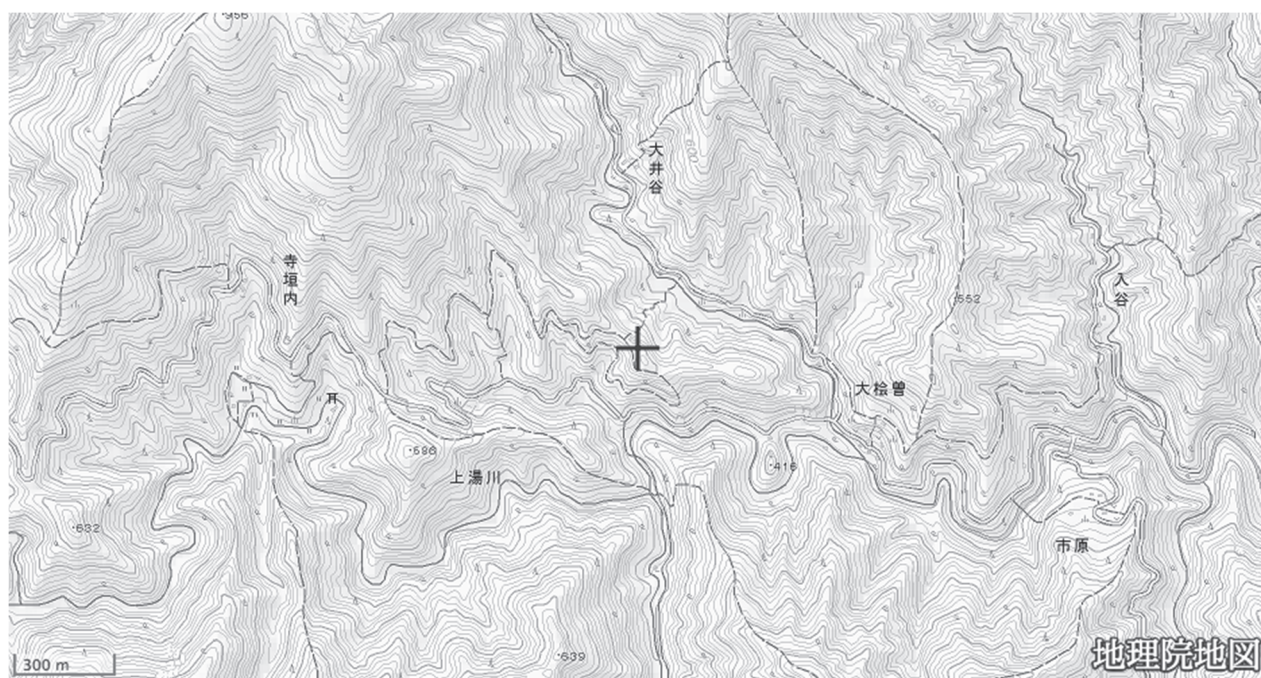


図 3 旧上湯川小学校周辺地図（中央の十字が学校跡。地理院地図を用いて伊藤作成）

そこには当時大きな一軒家が建っていた。その家までは、山の上にもかかわらず水道が通っており、店舗としての営業もなされていたという。

3. 2. 学校設備

学校は、約 60m×40m 程度の長方形の敷地の中に、登ってきた道側に運動場、少し段を上ったところの左右に校舎があり、右手に長方形の小学校校舎、それと向かい合うようにコの字型の中学校校舎が建てられていた。校舎は平屋で、小学校は、玄関を入ると右手に物置、左手に事務室・職員室があった。物置側に教室が並んでおり、職員室側は 1.5m 程の幅の廊下であった。1~3 年生の低学年で 1 つの学級、4~6 年生の高学年で 1 つの学級という、複々式学級の教室配置をおこなっていたが、田中氏が通っていた頃は、中学校校舎に、3 学年分の生徒が学習するスペースがないということで、小学校の高学年の教室を板壁で半分に区切り、そこを間借りして勉強をしていたという。

学校の図書については、1966 年 6 月の村報「十津川」に記載がある。「このほど、大阪の帝塚山学院高校 2 年、岡田康子さん達から、へき地の子供達のためにと、上湯川小学校へ、りっぱな本がたくさん送られてきました」との記載がある。「子供達は大よろこび」で毎日「ひっぱりだこでよんでいるそうです」、「児童会を開いてこの厚意について話しあい、上湯川名産の椎茸に、自分達山村での生活の実態を作文に綴ってお礼を差し上げました」等と記されている。「少年少女世界新文学全集」など 59 冊の寄贈図書があったという。

なお、西田（1974）は十津川村の学校統合と廃校施設の転用について詳述しているが、上湯川小学校の校舎が閉校後に取り壊されたとしているのは誤りであり、実際にはそのまま残されていた。現在は写真 2 のように倒壊している。

校舎より南側 50m ほどのところに教員住宅があり、小学校校舎よりもひとまわり大きなものが建てられていた。こちらには既に建物はなく、敷地のみ確認できる。

教員住宅のさらに南側にも道は続いており、そこを進むと、公会堂の跡地に至る。ここは、大字の集会や祭りなどに使用されていた。ここでの盆踊りは、屋外ではなく公会堂の中で行っていた。そのため、太鼓の音が大きく聞こえることになっていたので、別の祭りで、屋外で太鼓の音を聞いたとき、こんなにも太鼓を外で聞くと小さく聞こえるのかと驚いたそう。公会堂は、当時の上湯川のコミュニティのセンター的機能を有していたことがわかる。

4. 児童数と教育実践

旧上湯川小学校の児童数について、十津川村教育委員会編（1975、pp.298-309）には各年度の卒業生の人数が

記載されている。表 1 では、統合される 1969 年までの 6 年間の卒業生の人数から、当時の全児童数を推定した。

また、1966 年度のもののみ、集落（地区）別・学年別の児童数の記録が残されている。表 2 からは、散在しているいずれの集落からも当時は児童が通っていたことがわかる。



写真 2 現在の湯川小学校跡
(2018 年 11 月 4 日伊藤撮影)

表 1 1963 年～1968 年の旧上湯川小学校卒業生数

年度	1963	64	65	66	67	68	計
人数	9	4	8	9	7	4	31

(十津川村教育委員会編（1975）の pp.307-309 を参照し伊藤作成)

表 2 旧上湯川小学校の集落別・学年別の児童数

	川 又	峯 地	垣 内 地	大 井 谷	大 檜 増	入 谷	市 原	計
1 年	1	5	2	1	0	3	0	12
2 年	0	1	1	1	0	0	1	4
3 年	1	2	3	1	2	1	0	10
4 年	0	3	1	0	1	1	0	6
5 年	1	2	0	0	0	1	1	5
6 年	0	1	2	1	1	2	0	7
計	3	14	9	4	4	8	2	44

(1966 年 4 月 6 日現在。十津川村教育委員会の西川第二小学校関連資料を用いて伊藤作成)

教育実践については、児童数や、学校設備の情報よりも、さらに資料がない。これに関しては、田中氏の話を中心となる。

まず、当時は毎日、学校に着くと数人の児童が、教員住宅で使用するための水を学校の正門の向かいの民家から汲んで運ぶ作業をしていた。当時、教員住宅には水道が引かれておらず、学校の正門の向かいにある家まで引かれている水道から水を汲み、教員住宅まで運んでいた。

「勉強をせずに、力仕事をしている方が楽しく、喜んで手伝った」と田中氏は語る。このことから、旧上湯川小学校では教員住宅が近接していたことから、子どもと教師との距離が近く、コミュニケーションがとりやすい環境にあったことがわかる。

学級は複々式であったため、授業が都市部と同じように進んでいたとは考えにくい。異年齢との関わりは、常に同じ空間で過ごすことで充実していたと考えられる。

旧上湯川小学校では毎年、運動会が行われていた。運動会では、小さなグラウンドを最大限使うために、写真3のような、周辺の斜面になっているところに足組を設置し、その上に板を置き、平らな面を拡張して、簡易の観客席を用意し、そこで観戦を行っていた。競技の1つとしてマラソンがあった。運動場を出て、西にのびる「横道」を走り、往復して戻ってくるという約10kmのものであった。



写真3 運動場の西側に広がる斜面
(2018年11月4日伊藤撮影)

5. 学校跡の現況と卒業生

現在の上湯川の学校跡には、十津川村教育委員会の建てた石碑があり、小学校と中学校分校の簡単な遠隔が記されている。その周辺には写真2のように、倒壊した校舎や運動場がある。田中氏によれば、つい最近まで倒れていない建物もあったが、今回登った時には、全ての建物が倒壊しており、校舎があった場所は足の踏み場もないほど木材が散乱していた。教員住宅の跡地には平らな敷地があるばかりで、木材も建物の姿もない。トイレとして使われていた穴が残っていたり、教員たちが飲んでいたであろう酒の瓶があちこちに捨てられていたりしていた。

上湯川の学校の校舎跡は、閉校後に使われることもなく、山の上であることからほとんど人が立ち入らない状態にある。立ち入るとしても、近くの住人が松茸を採りに山へ上がる程度であるため、このように倒壊していてもあまり問題とならないのである。

卒業生のその後について、2005年8月の村報には、「ちょっと変わった同窓会」というタイトルの記事が掲載されている。「6月18日（土） 上湯川小学校が創立130年となることを記念して、ホテル昂で元上湯川小学校の同窓会が開催されました。この同窓会は、西川第二小学校に統合（廃校）されるまでの卒業生や在校生及び赴任された先生方を対象に行われ、遠くは北海道苫小牧市からの参加もあり、98名が出席しました。小学校を卒業して40、50年ぶりに会う人や、年齢差が親子ほど違うことなど、思い出すのに時間が…。上湯川小学校に赴任した恩師は、昭和初年前後の不便な生活や子ども達の素直さ、保護者の親切さが印象深く、再会した教え子達との思い出話に花が咲いていました。午前中には、約20名が朽ち果てつつある元の学校や、すっかり杉山となった教員住宅跡を見学。神戸から参加した島本さん、玉置さんは40数年ぶりの小学校を見るために午前2時に自宅を出発、面影が残る母校を見て『思い出の学校を一度見ておきたかった。幼かった当時のことが思い出され感動しました。』と語られていました。参加された方々から『久しぶりに学校を見た、何十年ぶりに友達と再会して涙が出た…。』などの言葉がたくさん寄せられていました。地域に学校があることのすばらしさを感じると共に、山深いへき地ゆえに助け合いながら培われた特有の山村文化を感じた一日でした。」とある。そして、参加者の集合写真が2枚掲載されている。

田中氏によると、その後も同窓会は何度か開催されているが、上記の1回目については特に「思い出話に花を咲かせ、涙なみだで大盛り上がりしたんです」と話している。このように上湯川小学校に通っていた世代の方々の多くが高齢者となった今、当時の記憶を語り合う仲間との関わり場の場として、同窓会は大きな働きをしていると言える。

6. おわりに

本稿では、十津川村大字上湯川にあった小中学校について、現地調査や卒業生の話、文献を用いて述べてきた。このような人口減少に伴う閉校を第三者の視点から悲観するだけでは、何も始まらない。

旧上湯川小学校では、前述したように、学年を問わず合同の同窓会が行われ、小学生時代を振り返った。我々にとっても、自分の通っていた小学校は思い出深いものであるが、それがなくなってしまうことは大変悲しいものである。しかし、同窓会などを開き、定期的に当時の仲間と会うことができれば、その当時の記憶も共有でき、

繋がりも感じることができる。それと同時に、上湯川の学校跡を訪れる機会も増加するかもしれない。そうなれば、跡地についても、現在のように木材が散乱した状態で放置してはいけない。人が集まれる場所にするなどの工夫をしなければ、人がさらに立ち入らなくなり、荒地のまま忘れ去られてしまう。

これから日本は、さらに人口が減少し、少子高齢化が進んでいくと思われる。さらに大都市に人口が集中し、ますます人口減少地域が増加するであろう。そうした意味で、現在へき地として認識され、研究が進められている十津川村は、未来の自分の暮らすまちの姿かもしれない。そこで、現在へき地が直面している課題を当事者以外の人々が考えることで、これからの人口減少が招くマイナス面を、プラスに転換させる取り組みができるだろう。それは教育においても同様であり、自分とは無関係の遠くの田舎の話と捉えるのではなく、自分事としてどこまで考えられるかが重要になるだろう。

なお、本論文の脱稿後に十津川村教育委員会から、十津川村歴史民俗資料館にて旧上湯川小学校・旧出谷小学校・旧西川第二小学校等に関するさらなる資料が見つかったとの連絡があった。そこには学校沿革史や卒業生名簿、学籍簿、学事報告、校舎や教員住宅に関する資料などが含まれているが、本稿には反映できていない。これらを用いた検討や、上湯川の小中学校の元教職員および卒業生への聞き取り、他校の教育実践との比較も今後の課題である。なお、大字上湯川に東接する十津川村大字出谷にあった出谷小学校等については、松野・河本・馬（2019）として別にまとめたので、あわせて参照されたい。

付記

本研究の実施に際しお世話になりました、十津川村教育委員会、および総代をはじめとする大字上湯川の関係者に心より感謝申し上げます。本研究は十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施し、2019年2月3日の十津川村史編さん委員会報告会（於：平谷地区生活改善センター）で発表しました。

引用文献

- 玉井康之（2018）「総人口減少社会におけるへき地小規模校の特性と政策課題とのアナロジー的分析」、『へき地教育研究』, 72, pp.1-10
- 十津川第二小学校（2018）, 平成30年度学校要覧, 十津川第二小学校
- 十津川村教育委員会編（1975）, 十津川学校史, 十津川村教育委員会
- 奈良県吉野郡十津川村（2010）, 十津川次世代育成支援後期行動計画（平成22年度～平成26年度）, 十津川村
- 西田博嘉（1974）「山村における学校の廃校化と廃校施設の転用—奥吉野山地十津川村の学校統合を中心に—」, 人文地理, 26, pp.217-231
- 松野哲哉・河本大地・馬 鵬飛（2019）「山間地域における1960年代以前の『へき地教育』の性格—奈良県十津川村の大字出谷の事例を中心に—」奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 5, pp.175-184
- 三村浩史・西村一朗・延藤安弘（1965）「道路開発にともなう山村の生活環境条件の変化と問題点」, 日本建築学会論文報告集・号外・臨時増刊 学術講演要旨集, 40, p.608
- 柳瀬正弘（1937）, 上湯川郷土史, 上湯川小学校